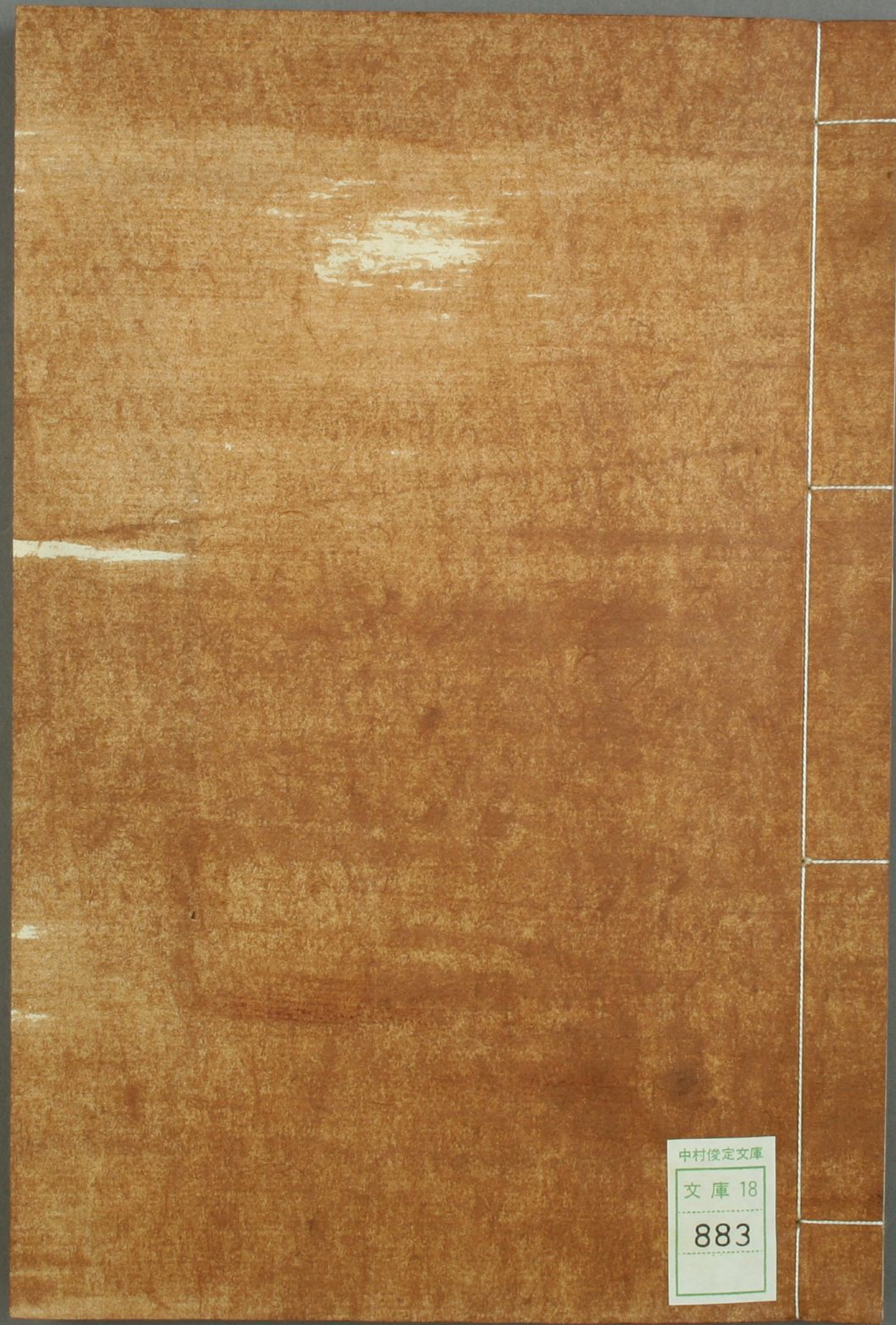
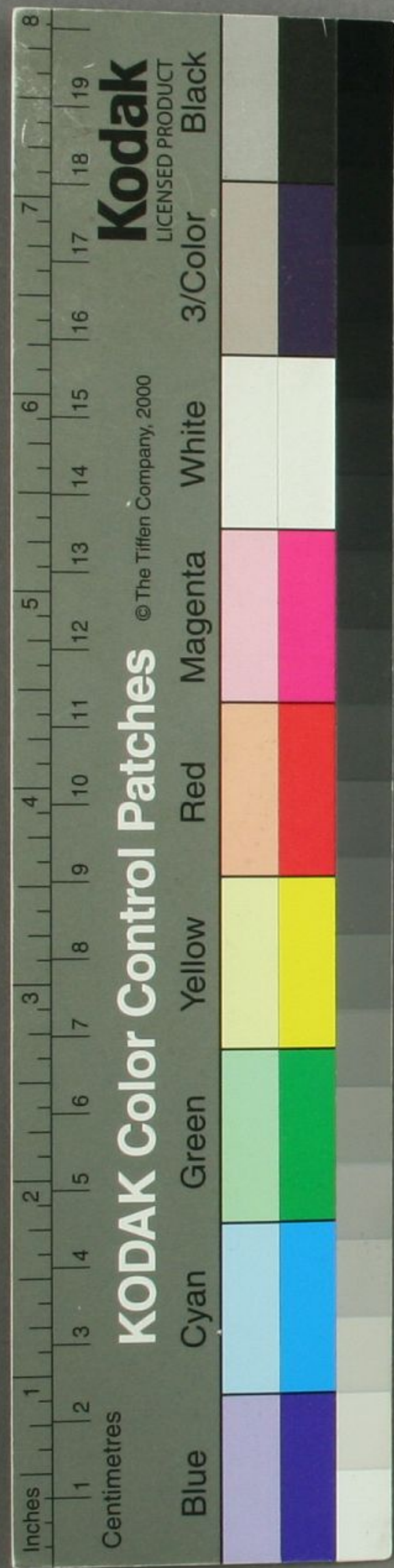




中村俊定文庫
文庫 18
883



嘉永二

葵々友信吉千句評

は左斗馬

全

錦江撰

中林里蘇烈蘇田蘇

序

人の謂へる言あり 航路の商人の珍らしき作を
かさねたる八九重の塔に立りて海のはしこを
はつすかこし 唯羽子板の夫婦の様にあり
しと也 彼の人々のしものも判るなり
及故たハたとへ東海道の馬駕に乗ると
無益の酒代を費さる用を以て世の御世を憂す
へき也 是此論のなる所なり、嘉永二年秋ハ

月下軒

嘉永二年

秋



七た小雲

主人燈下にて部集通古を著し冬の日暮り日ハ花
 の花田巻とやいふ一詩は風の真実は猿之の夢徳の二集
 にあり、猿蓑ハ俳諧の古今集なりと古人にやされ、初
 心是より入る一と守陀法師にも見えたる方と古を唱
 へて今を論ずるのいとまニ三子問て白雪中庵夢た坊か
 住光千句の序に俳諧の千句は守武の独吟貞徳の紅梅千
 句以来世に神に構ふよし見へ侍るそ小より以前千句と
 いふものはなきや主人答曰連歌に紫野千句、熊野千



中村里秋原稿用紙

句、石山4句あり、其外にもありとも俳諧にハいまた
きかす 宇武貞徳の4句も又連歌の俳諧なれハ正風の
俳諧にあらず 住吉4句ハ蓬川の法樂にて古しへの4
句にはあらず也、同て曰延宝の廿歌仙ハ芭蕉の花に
して延享の廿歌仙ハ其年の花といえり、彼の4句ハ宇
武貞徳の花舟ハ此4句ハ安永乙未の花にして昔を今
にまゐる花とせん也 宇武貞徳の4句ハ古風にて正風
にあらず 尾張の五歌仙に謗林風の古作を改り、春の
日、あゝ野 ひさこに正風をひうき、猿蓑集に於て海
情定まなり、延宝廿歌仙ハ春より謗林風にして 正風

中村里 秋原稿用紙

に論すへき書にあらず 延享の廿歌仙ハ其年の門下な
るといえども夏風にして正風にあらずと夢太坊ハ大い
に是を咎められ 延享の廿歌仙ハ延享の花を共に稱する其序の
詞をさへに殊にくらり いかで此4句をして宇武貞
徳の4句にたくらべんとの意あらんや 實に住吉4句
ハ正風の巻にして他の4句の如くにはあらず、同て曰
然らば此4句ハ正風の規矩ともならずや 答へ曰志
ばく是をたけ 柳亭保之文以来俳風の起る事唯延享
二十歌仙のことすのくにあらず 化鳥 北風
の風作都下に充滿て人正風の俳諧あるををしるす 夏

不角はしむわんかせ八集あり
しやれ 北風
りしむ

二に於て葛飾二世馬光翁は宗瑞蓮之咫尺長水と五色墨集
 を著し素丸老師ハ二世宗瑞斑象葛太竹阿と續五色墨
 集を述へ又百巻、續百巻の句合を出して大いに都下
 の俳風を正すしかるに猿杓の表の風を語らん
 ハ皆是馬耳風にして更に甚正風作なる事をしらす、ま
 た俳諧なる事をしらす故にしばらく彼の狂風に和し
 て是を導くが爲にして其集を著すか故に五色墨の風
 調ハ実の正風にあらず是ハ俳諧当來の余前經の方便
 といはんれ坊が住吉千句也又是余前經の類ひにして
 俳諧と實の壽景風にあらずを此千句を蕉門の規模

中村里秋原稿用紙

として稱譽する人こそ心得ぬ是や彼の享保元文郡下
 の騷風のことく俳諧と實の情味に微天せする象をたの
 づいて、問て曰然らば住吉千句の附合に正風に遠く類ひ
 其あらずしを明し玉はんや答て曰恒變ハ其門より
 出て此千句をぬめり之千満なり謹みなりなとさ
 まくに申せし也。されハ今は、かるべきにあらずと
 いへども人ももてはやす集うれば明神の恐れも多き事
 己さ小と二三好の問ひも黙止かたく世の感惑の歎
 ハしけれハ唯社中の爲に其一二を言はんあなかりこ
 關門外に出す変なかれ、其附合の内に

何にゆかりの桔梗うつくし

縫箔の廊も鉄いのかとまゐこ

夢 太

柳蕉翁ハ附合十五作を立て門人に示し 七名ハ作ハ
 蕉翁と支考の再案にたふすよしハ坊も申すゆゑ二三子
 も志す処なり 歎つけハ其場の附とせんや 前句ハ桔
 梗の花の盛りなるにた、縫箔屋をつけたるんにハ桔梗
 にも限るへかゝす 予意桔梗を紋所とし模様として
 鉄の糸に帯節と恋とをあしらひたる其ちから天晴なり
 といへりし 其意巧に遇たるハ、其餘情にゆきつまず
 こりやりし、彼の縫物の裏を見るか如く、芭蕉^蕉になす

調え、是等の牛乳をもて世の人心をとれる事恐ろしき
 坊が意中なりすや

眠りなすはかき夜張の風すし

日かな一日文セリ音

夜 兔

文セハ元結ニきなり、文セハ音ときこへ第^一作句作り
 無益の事なり、元結ニく音とある一ハ、^二風波の俳諧
 己詞の俳諧にあらず 斯くのことき変化集に多し、
 ことく、に是を評せす

十里ゆき五里ゆき船の果やうす

僧を忘れて

機うつさくり虫

夢 太

有登 権 権
 銭 高 浪
 中 (杜甫)

機うつさくり虫

日本橋の高札にも博奕は禁^五ふよし明らか^二殊に僧
の破戒無慚なる此句風雅もなく悪逆無道の姿といふ一
し破戒不義惡逆狼籍の類は自にして當然なるハある
ましき事なりと貞徳寺吟といましめおかし也、雪お
ろしに

あつまた在番城の夜半の秋

此句を評して連歌俳諧とも道とする如ハ其ものくに
より己を正し君を諫め神佛の加護にもあつらんて
こそある一けり此あつた形の類は姦乱尾薨の句にし
て知るぬ人間はいかゝ答ふべきやとあり此撒らん

まくり午^の句ハ姦乱尾薨にもますりてもしや他の句た
りともあるましす殺風景なり、りかて神の感應あらん
や、坊か人を責るに厚くして己をゆるすことのほしめ
まゝな^二是文と目なる故にや

ニ哀智

あ歳の秋来る宿も餘の音

つゝお二百も風見おの痛 夜免

万歳に物を与ふ事 鳥目武石文に限る、からず其
家この嘉例ある一し 但此句のことくなくハ二万の銭
銭もとあるべきが、二百とはわりにてハ銭とハきこ
ゆきしく 例のかたき也。

惟子の歌いハ安し銀五百

支考

一歩につなく 丁百の銀

乙冊

古集ハ斯くのこくこ 但つけ方前句の秋といふにハ
更によせし 唯万幸つけたるのこ

相店はいとなミ立て松の聲

さねハ三途の川をたし

琴太

前句ハ松立 年々暮の句なり 此つけハいまた親相

とさこへす 唯年暮のうりゆくより 此方に衰を病

死するとの心をもて 理屈のつけ也。 婆ハ更になし、あ

る人曰されハはさけとてとりふ事也と夫にこハ猶更

中村里松秋と原稿用紙ハ

前句にあたりて 理屈ハのあやめたり

相店ハいとなミ立て松の聲

誰そハ三途の川の旅立

斯くもあハ無常迅速親相の附けにて 其場に其場婆も

見へて本よりよき句にはあハされとも 彼の理屈をハ

通るへきにや 坊ハ何故に過てるや

又末こハ妻の里の 頼みこと

ころりと空の 軒 四五十

吐 月

女二句のうけ 餘情存情 千万にて 更に 風雅なし 同い心

ながら

卯
二
表
端

又来てハ妾の里の 頼ひ事

宿^言に起て 酒盛てやる

斯くありハリき、ハカ風雅もたありともあるへきにや

情^中に乳石の寝芝 ゆき歩り

嬢が半座の蓮にたくる、

夢 冬

此句の詞嬢が半座の蓮といハ何妻をや 蓮におくる、と
いふも又きこえず 唯推量をして蓮の半座と解す、ま
句なり 附ハ前句の姿を妻に死に後水たる男と見て附
たるのこなりハ嬢が半座といふとも論なし、きこゆる
様に句作るべき事也 又おくる、とありハ現在なり、

おくれしとありハ過ぎ也

此句おくる、とありハ今女

房の臨終の時の嗟嘆ともいふ一し しありハこれを見

捨て乳石子を懐^懐にして守りする夫は不人情といふべき

也。畢竟妻に死におくれとはありにて附心ハ是りたり

そを替へ詞に言ひんとてあることきハ遺憾少な

かりす蓮にたくる、の嬢の半座のといふは上りみに

して一句の面白くも糸似もなし、句はあしくも二句の

るに姿ある様につけてこそ芭蕉情といふべき也、ま

こへさる句をして盲俳を驚かす高ひふハ名人の所爲

にあらず、

懐に乳香の揉みゆりありき

妻におくれー神の候ひ

なと、あ、ハ姿も十分にえやへきにや

柳の腰もいつか杖突く

歌玉ふえー玉た水の陽炎に 夢た

此句ハ前句を小野の小事とえゝるあふむ返一の傍にや

人違ひにてつかす小所があふむ返一のうたは

もとの身のあうしすゝかにあふむも

この玉た水の内をゆかーき

えし玉たれこいなし小所ハもと大内にすまぬ人なるよ

し諸般に兄之侍る、中納言重範卿の配所より帰て内

へ来り留わたり玉ふとき女房たちえ玉ひて

雲の上ハあうし昔にめけしやと

えし玉た水の内をゆかーき

とあうしそやの字をけせんといふ字をかたけに書

こ返一玉ひ事ありみし玉た水と詠しハ小町にはあう

す是坊かふせんさくよりたこゆり芭蕉にあき事之

名残表十二日月 蛇蛭なく夜の翌日知そ

十二日月をうう空にきぬたのめう衣 夢た

此句更に解せず作者のいしるへき也 作を重ぬるの過

力五二ノ家
七ノ日

也

あつかうた頼て候す柳こり

八ノ日

すけしりありの厠こみ合ふ

左

不二の同布と足たるにや厠ハ酒厠雪陣の事なる一、
厠こみ合ふハ骨柳を候す、其場にあす
にして更に附かざる也
前句と別こ

日のあけめくく月う六阿弥陀

花火にみゆる 朱合の 頼

合

六阿弥陀頼りハ彼岸なり、花火ハ七月之
時節おもは

しあき

一吹風に謡吹ちる

浅らさしと長柄くわへの内證文
夜 鬼

是ハ不附句也 謡の風に吹ちるとハ奇怪の詞ながら其

場を牽すハ戸障子明廣けたる座席なる一 しかる

に婚姻の他へもうさゝる内祝言ハ奥深き小座敷をこに

あふへきま也 婚姻に謡武士に鑑 花にぬり笠と斗つ

ける古風の能階にハあふ一し いかなる盲俳といへと

もつ風を稽古するもの 是等の事ハ亦ふへき事又

未進の高の果ぬ算用

芭蕉

隣へもしらせす姫を連れて来て
野 坡

屏風のかけに欠ける菓子盒

芭蕉

是等のつけを以て分別ある一し

ひともしの句ひを袖につゝめども

恵心の目きゝ厨子開く乙

夢太

二句のる無礼無作法なる意趣あり前句つゝめどもと

ハつゝめども句ひの高くあはれきこゆる也然るを

遠慮なく其佛の厨子ひらく佛罰とたそろしからすや

ひともしの句ひを袖につゝめども

恵心の作の目きゝ迷惑

ともある一し但恵心の目きゝとはめづりにてハ134の片

言に仕立てるハ何事ぞや宜麦のいへるもまた宜なりす

や

古りけの通ひひろけてつめひさき

位牌や物をいけんとすらん

夢太

二句のるのさもしさ茶了へさ也

次信と活聲たつや雪礫

夢太

りお冬松の染木誰と

吐月

茶句ハ佐夏次信の終を守終結の文表に立て義結の命に

代わ了古事をもて花聲の前に立て雪礫をうけたのはい

かなる恵の意趣にかあづけんか脇の染木ハ男の女

の門に立るしるしの木にして逢ふべき男の漆木とハと
 リいる陸奥の古き習ひなりとそ一句の姿を考あれ
 はけふ冬杣の時たきたる漆木の主ハ誰とにあると
 案する様にそふの要礫うつ時其漆木を誰かれと許す
 了にはふはざるし何所つけたるにや礫を悉の
 意趣と見こ此悉の道具を並へたるのみにていつけと
 いふものにあらす猶案するにサトハけふ算と定り
 たるに此礫をとりならん誰にある一すやと思ひや
 リたるつけとせんか然らば之のまに安んじ、又一
 句解すくありす是例のわがりにて猿みの姿像にあふ

中村里秋原稿用紙

翻え 強て論するに及ばず
 皆はあめうと棺足あくる
 唐猫の鈴あふくと結極端
 人の別れには北情の草木も色と美あふとそ在の凡雅な
 るつけやすてや日比牛牛一愛獣のいかに高類な
 むはとこかくはあふすしきるや、さハ言へもとより心
 あき毛ものちやハさしあふ一きちやもそよにてハ木
 に木につちぬ句となるし同じ事なり
 皆はあめうと棺足あくる
 唐猫の鈴あふくと何をして

たりありハソコ、かゝる一ツのや
 二ツの五の感情
 ありつゝある一ツ
 但能ハ概嫌とある二ツの五に
 深く然傷^傷の意をきかせんとなるへけりともかの蓮の糸
 のけともえ未なし
 既時すし
 世説をよみて花子しはる
 夢太
 ついそこに廊のみゆる窓ある
 吐月
 前句唯其通りにして世説花子のつゝハ何の意趣ある
 やしるや
 世説ハもとより晋人の説き清法をとりて
 朝唐宋に至り儒佛を花の風骨^骨を輯録せる書たハ王輔
 何晏^等が花の談ににけるありといへとも花子に限る

中村里秋原稿用紙

たる書にはありす
 忘るハ此句何を主意とするや、
 更に承しあり
 所句意なりトハ其意の花簾なるや
 世説素なるや
 是又更に承しありす詞之、
 唯意の承にて讀書したるもの所に
 ありハ世説花子に
 は何を次につけたるや
 志るや
 論法にても詩經にても
 何にても差別なし
 世説をよみて花子しはる
 さハこそあやつる廊の桔槔
 又
 園雨のそとけり
 廊く窓の東

莊子のつけにはいくともある一斗之
無何快の末練といふ一斗也
そふをつけぬは

塵拾ふ千部の秋のこけ小末

車をてうう

還還幸の月

夢々大

附向ハ今寫眞旋轉の時なりこけ小末の藝拾ふハ其時に
ある(事)か
つめ句こ

殊に逢ふ夜の周にとほつく

駢かーす我空蟬の反古紙帳

半切おむてわける

結金

窓あふも通ふ千島の提德利

金

是等殊にぬめうたる句也

此外の句枚舉するにいとま

ありす、万部十春の内 巻こに十句也句に及べり

是を推して知るべき也

二三子是を案せよ

粗相かと拾ふて笑ふ床の角

尼うち交る 女はうめり

家内出拂ふ海に市比丘尼

梅干に日かけの是うみ晴曇也

是等ハ意美すくさ附なる一——此位去々句ハ心風の俳

詠に志て

延空二十歌仙の歌に及す

又延空二十歌

仙の歌にありす

そふは其附も句も心風の風調ある哉

三

ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）

三

前掲、ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）
ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）

三

ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）
ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）
ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）

三

ひやうきとては男児、只ちとて
女児（え娘、この死すにや）

也。さへきへ斯く難論を生ずるに其專意とする処元
 リ。ろり物ちへ之と之師は笑ふへ更に答へ玉はさり
 き。柳坊が俳諧のいかにといふに、其師ニ世に名にまか馬
 芝翁にも臨身して月月の情を琢磨する事久し。雪おろ
 しに延享ニ十歌仙を論して。
 梅折れハおのれも動く月夜哉。湖十
 初いなひかり雪やりの末。左
 大名の光あやわ鳥啼りて。左
 茶臼ハ理窟にして梅折れハ我身も動く筈也。意味少し
 しなし。肺ハ夜介に袖芝と寄せたるにて。魂なし。卯ハ

なきは夜介が村雨の姿也。卯三の一句ハ旭に陰あつた
 る馬の勢あは。とこへつけたるよや茶臼ハ
 梅折れハおのれも動く月夜哉。
 こせハ月影夜影もたひしあゝん眠ハ
 卯子もろの花の名達。
 卯人の雪のうりかく了也。
 卯三卯子も光りに。
 高桐に端山の春を配うせて。
 ともある。一さし。まきまき。カサカサ。ちう又。

出代や秋の夢の思ところ

和推

急に返るの果め君の秋

全

是等つちぬ睨て夢といふ字に附句を奪け水て君とは

あうあしうけ水たう、け前句を捌 枕の夢は恵有と包

て

漆てもうた 神の春雨

斯くつり水ハ書面に恵いたけ水とも傍車中の思ふ山

と け春在所の跡とるべき算定り親のあめひに來た

る別水の涙雨たしか成て 万と乞へたり 是や文意の

露川妻の汗滴よりし 似て雲に白風の意ハ替り事方し

中村里秋原稿用紙

しかるに此句の斯くのこときは不審す人可也。よ

しやうり物たわハとて 己を曲て人に従ふは古人の世

じふ知なりすや、此句の世説莊子の地なく、鵲鵲返

しの事のふせんさく 其附句もその意味を失へる

はた何更そや 公孫紅住菴の記に莊子の意を以て罔雨

に是非をこらすと言ひ、杜甫黃庭堅の詩を断ちて魂吳

楚東南に走り、身ハ瀟湘洞庭にたつと申されし類いに

はあす、よしや坊ハ文盲にして和漢の更故に不案内

なりと人は言ふとも 俳諧ハ名人上今の名を得るにあ

すや 志あるに前句をもあまわけず 一句もきこへか

たく午年をほもさたかなりす 片言謎のめめりをと
交へて 住吉の神にさしけ、世に公けせしは 世上の
狂風をたぬ人にもあるへけとす もと 是圓圓扇の
はししものといふなり、ほめを遊ふハ俳諧の言法なり
ともけめはたさハ又ためしあらず 考へ試る処あるへ
しとも 坊が名の大さなるにやめ 驚くへめず
俳諧の集むもハ前後の猿みの炭俵を規矩とし、風
雅并寂榮を利器とし、露川責雪おろしの評論を尊とい
ふ 逐に名匠といなるべき 問て曰世に名人と云
ひし人ハ師ほろびて後ハ其末練の勝もあるけりて、前

中村里秋原稿用紙

日のことくなりさるよしハ、友人ハ申せしなり、雪お
ろしと住吉午句と前後の相違せるも又此類ハあらんや
、雪おろしハ恐らく二世流雪の午になりしものと思は
る、いかゝある（き）にや、答て曰 いまたしるへめず
す 吏登奇ハ宝暦四年六月移故し 雪おろしハ其前二
年の作也、住吉午句ハ吏登改後二十餘年を経た上し
かるにけ坊
五月雨やある夜ハえめに松の月 夢ろ太
といふ句をなせしに人ニ感吟にたへず実に名人之と稱
せしなり、えこ水

用やあるをいふに 雪の花 菊 五

といへる句の詞をとれり、何れかまさう何れかおとれ
りとせんや しあるにひそかに秘まつとひひ ひそか
にゆきといふ同じ詞のひひきなき 此をひにまつ
といへる縁語をもて 世の首飾をおとろあするより、
飾階せさるものも、是をしろさる方し、是方か幸にし
て飾階の高ひ上りといふべき也、坊ハ宮に上り也、人
人なり、位高き句をもて其飾階を重たうへあう、人
をさるものありありす ~~二~~ ~~三~~ ~~子~~ ~~二~~ ~~三~~ ~~子~~ ~~二~~ ~~三~~ ~~子~~ ~~二~~ ~~三~~ ~~子~~
経説とて我飾階のひひきめに備へ 二風正賞の書量

中村里秋原稿用紙

品を唱へ、飾階如來の証明を得よし、ほむましきを
人のほむるハ笑ひて遊ふし 人の譽るにまひてほむ
ましきにほむるハ彼が誘ひ果也、恐るべき事にも
波多連雪 終

跋

此書は位高き句の評閱の書ゆき也、此句を享保寛延の
五色墨集に比して世を撰るの権教なりと云ふ論友
リ、えより野矢と高き飾階鶴と云ふ一 する斯く
然るは不白にの飾階師なり 或人の抑々州の北西

清と鴻星を度ふ事能ひすといふ
唯口を閉へしとこ
そ有る人哉

附録

他日ニ云子請て曰波多雪の句評粗會得し幸ぬ
くは句毎に解し玉はんやとあは即共に筆をとて秋
日ノ經景をむすほう千句の巻終より畔にあたりて木に
もかけ綿をいえるにいたり日も夕陽に傾むきぬは餘
いなそくしるしと爰に筆をとめたり、其解に曰
白雲の目にもろくの御板かな
其後ハ神代の巻に伊勢詠尊筑紫日向の小戸橋の樟原に
いたりて被除し玉ふしより始りみえきといへるは身そ
きの詠詠にして身のきたるさげが心を拂ひのそきて幸

福をおくの神是なるよし承りぬされに夢大仙の社頭にて
ぬかつき東南山崎の景色雪の白ぬにうたふたの四千里の
眼を相め心もすがしく身の不浄をもはうひそく
たる思ひあるより斯くい吟しられしとぞ神祖奉納の句
を小は其終に言ひあたる自然の面意より十句の巻終さ
も何のへきやある

注連まにこらぬ冬田一畝

扱魁

貞徳老人此詞も協よハ其品と傳れしと發句の言ひ減
したるべしきを言ひへたるをよろしとす此協ハ砌に
高き去年の相の實といへる初懐紙の格にも似たりとい

へとも濁りぬとあるは神祇の詞に倒れたるや柳此冬田
は圭田るやあるへき情くしきよく作られたるは勿論と
思はるべし社頭より遠く是を乞ふ時は其水の濁りたる
やすみたりや知るへきにありす作振にあたりきたる詞
にして心の理屈をのり水さる所之、唯注連さよふかに
又ハ注連のさきよき又ハちうあきとしあつて雪中の神
田の景色十分にかへき也

橋の家ある系図句りせて

か三階分たけ高くきこへ傳々と附こゝろは冬田の地
頭領主を橋姫とてたのみにて前句により所更に存し

但伯の神主津守氏の橋姫なりや（橋本の御道相承せし）家
る系圖句はてと句依に作を重ねたる事此佳吉4句の
調にして却ち風味を損す餘計ハ砂川の氷松にそくこ
とくある一といふは依に過たるハリや一五の句
ありハ古拙の調を乞ふ知のハ一習ねか抑之にゆく掉
さして此句の餘情深遠也唯詞のひききよてハ拙く味
ひなし

旅のつみかをしげしとてこそ

暮た

四句目の終みさしある一し橋姫の大家に旅人をとく
了事にやしげし休むゆへとのこころきこへ侍小と斯く

中村里秋原稿用紙

詞を言ひ残してきめんとするゆへきこへめ句も多く
之へあり又橋姫の人を直る旅人として其人のつけと
するときハしげしとてこそ休めときめせたる也唯言
ひ並へたるのみにて是といふつけにもさたかにきこ
へ侍うや何にもつてさ句也是前句を精しく察せざるの
さる未練をいふ一き也有りて姫一十の盃^{さるもの}
上のたよりにならる米の直^{炭俵}堀の外また桐の蔭か
る上四句目かくの如し有りてありてき事也
針とるもおかしき筈のほつれ糸夜兔
旅人の姿をもて自にてつけたり此筈ハけや用たつま

一きを狩針とりて繕ふ事あさましき旅のやつ小也と我
と我上をさみしたる意なる一し是等なきこへたつ
けなみ句調ハ此集の僻をのか小集たり

木棉日よりに暑さふたゝひ 吐 月

時節のつけにて残暑の立戻りしさまきこ之侍れと暑さ
ふたゝひとはあうにこハいかしたるや増明かす木棉
日和に又あう秋もあるべき也、初心好むすしき句
作なり

暮 やすう山うそめとむ里の月 夢 太

其場にて時分を兼たつつけにや前句の姿情を案るに日

中村里秋原稿用紙

和に残暑の立戻りたるハ午末の刻のるなる一し 此句

は山村暮の姿にして其時分更に遠へり附あさう句と

しこし

友をもけさぬ鳥のいろく 夜 兔

山村其場の景色見へ侍る友とけさぬ鳥なくとい

へる古歌の詞によりん句作りなる一し、別に子細な

附也

守れとの祖師の提と臺まこ 吐 月

一句の上例のさたかなりすといへし是は起情のつけ

とはきこへたり、穀をいさくむる成すさや打出

しゝ殺生をさせぬと云はは二句一意也 祖師の掟を
守ふとけりて廣く言ひて是をきめたるなりへりかと
みたりたる聲^も其声ハりりきたりしなり 唯あ
やちして初を述^はすといふ一 然を瓢^{ひょう}の句作り
とらゆる時ハ初^はなりす
さうへに尽め松の門外 夢太
さうへといふこそ解しかたし さうあするといふ轉
流にや すいとはうひ掃除するをいふ 又ハ割子さ
う人の熱ひなるや 一句調はる作者ハしる一 餘人
にはさへす

とんとん花に帰朝の足荷うた、き 夜 鬼
其場のつけなるし 荷物をたたくは是をた、きてよ
ろこひうたへるにや、又ハ墓はこ^り拂ふにや くとを
陽てかくかこり
たすりおこせハ夜着にもたる、 吐 丹
前向ハ廳前又ハ向を端^はちとの姿なり 此句ハ一とるの奥
屏風たてたる内の作也 木に竹のこしく更につめさる
句なり 是前句を耳にしき、眼にて見さる可^は故にか、
るつけ句にもあまる也、此人ハ帰朝する人の老母妻妾
などの娘ふてあるにや、むかひ附の趣向なり へりかと

眼に之一寸心の理屈をのめさるる第一の難也然に味ふ
へし

竹篋もたゝあるすくの老嫗禪
夢 大

其人のつけにて病人を老嫗と見たる近の事也 無門関
首山竹篋の悟道をよめたるのこ別に子細ある一ありす

琥珀の光差と名つけし
夜 鬼

王岐盛来琥珀光と唐詩に見えたるより酒の具名とすは
禪に飲柄戒を^よめ茶といひて進むるとも其光を欺ふ老
婆禪の自をもてつけたる有る一し、打越ハ自他の変化
見てかく一し 但すゝむる人々一しとせしゆ人し 早

中村里秋原稿用紙

竟は會釈のつけ方ハ自他何ナも定むへき也 但琥珀
珀の光といひ酒ときめする例は調あり

丸山をけみハはるかにうき別れ
吐 月

前句酒を琥珀光といふより唐人と見て長崎丸山の傾城

に別れの酒宴を催すなる一しとのつけこ 志がれと

茶と名つけし酒をあはすめ意味は二句のるにきこへ

侍うす無念といふへき也

娘が 夢 大
夢 大

是又あやしく言ひ奉したる句作也 娘が涙の我膝にも

そゝきたるや又娘がなくに我もなきて我膝に我涙のか

へりたるにや 更に糸し兼たり 附心は前句の丸山を
 江戸本郷の丸山とて 八る丸お七か親^{市中}をひき悩さる
 、何ときこへ侍るさへハお七か親もおきて膝をうるほ
 すとしくちたり兎角に一句のきこへかたき[?]様ぢやなし
 たの恐つへき方術を 正怯には違あるへ
 贅このお池を 見へすすお月に 夜 兎
 是は娘の生贅にとるゝとてたつつけにて 其場の趣向
 なふりやとも前句を生贅にとるゝ家内のちりやを
 之の時に此地の月影はそこにをゆへかゝる 是も又耳
 にきいたるつけなりへ 正風にあき事へ

中村里秋原稿用紙

何にやめうの松梗うつくし 吐 月
 是は其場のつけにて 別に子細なし
 縫節のみせも軟ひのいとまあゝ 夢 太
 此附の变化に松別なみ 其海上にえたり 略す
 招餌おはきて 鰯のさへつり 夜 兎
 其場のつけで二句のうに家業の世説 一きさきしえへ侍
 るさへとかけさるゝといふ処一句の上はきときこへ 兼た
 リ
 東のふ花を けちうほのしうみ 吐 月
 是は時分のつけなり しあやとも 飼鳥の囀り 前句の改女

ふは其時分早とたうり考ふし

また松明下けに通る之日 夢 太

時節のつけにて是等きこゆる句作としるし

いたつとも事にこそよれ 體 體 夜 兔

一休の傳といきこへ侍れと是はいいか様なるいたつ

をたしたるや古事をしらすものにい更に解せず古事

につかはるゝといふへき也

哥舞妓ニ新しけに飛鳥川 吐 月

此句けに飛鳥川といえり飛鳥川の流となるるを

はきこへ侍れと歌舞妓ニ新のいかへせしにや一句更に

解しあたらけハけりハ海するに及はず 但無常迅速

の歌おより花麗を尽せし歌舞妓も測ハれとかけて寂

寞たる月とありとのつけなるにやきく人はきくし

眠ふなるはあり家陰の回すし 夢 太

前句いほあり知りあたらけし 飛鳥川といえるより夢

舞妓も休に其何あけし夏の宴にや其後のつけにて

納涼といきこへ侍れとも前句のたしかなりさるしハ

其二句のさしあけさ分海あり

月かな一日 文七か 夢 夜 兔

此の上句に評す猶論するに及ばず

刺させ

と古主思ひの思通し

吐月

案ずるに此句の心は古主の漂泊に奈心して豎刺り毀ん

とするをといめてつかひある忠志ときこへ侍りしや

りも金銀をまきつるに有るを要するを痛く句の同を

もて居るに前句の文統にくを古主の爲の業と見たる

附にて前句の博識にいとつかひうの一巻の難ハの

あるへあす 下ハ海前の堤に遠し

前句の低に

鶏卵附し

夢太

此句ささゆる句にこそ風作等前の控に叶ひ侍る

然れども会釈すとの附にて有るにあらはれハ猶より

き也

庭は留山の裾なり棲名道

夜兔

山中其場のつけなりといへとも今少し前句をふまへた

きものなすやしめ 他^地の徘徊とて 中^ゆの^すくや

殊に逢ふ夜の闇にとほつく

吐月

起情のつけにて是等きこへたる句ともいふ一し

蛙のさ我空蟬の反故紙帳

夢太

作に作を重ねたる句作りこといへとも附けハおろし

十分又上に評す

あつらふ夜すありあさ声

夜兔

其場のつけ也きこゆし

十里ゆき五里ゆき船の果やうす

吐月

是も其場の

僧を忘れし推しうまくり手

夢太

此句上に論す添ましき句也

欠ぬきぬ庚申塚も月の前

夜兔

其場のつけにて打越と変化なし

畔にあまりて山にもあけ稲

吐月

是も其場のつけ也 井に子細きし

此句の巻もみふ此類に凡そ巻一句の仕えあやうして

きこれぬめい様に作を重ねるが故にたと一きこゆ了句

なりとも餘情深長なりすは狀の句にまかたを中たり

然れハ一句のさたかなるる故に前句の噂講釈にまき

水安く二句一意となりてまゝ理窟を遁れす耳にき、眼

に見さる附けの之多くなりゆく也、たとへ二句一意の

つけたりとも

冬の秋蟬の糸に聲きくしつあきハ

夏の空つとふ雲はつちう

重五

さかひに 矢炮を今宵隔つと思へとも

毒のあくみし癩子三人

野明

斯く一句のたゝさる時ハ附句といふかゝ又耳にキ
、眼に足さる句ハ有し

炭表 敷金に弓同心の跡をつき

丸九十日湿を 炊ふ 利牛

さるミの 又元の はしめにニゆる 膳鈴席山

内蔵頭を 呼聲ハ 誰 乙卯

斯くのこゝく其姿情眼前につけたり、内蔵頭ハ西行亮
心の古まなみ、西行にあらずとも古まをしゝすともき
こゆ一し リたつゝとの 觸躰ハ此事を知りさるものに
ハ一句の趣意立たさハ解せさる己 是等の処住者牛

中村里秋原稿用紙

句の非をしりて後述すゝあらず 他門に在りて言はす
神して會得あり一し 何事か其類ありと見所あるもの
二三子是を考せよ

嘉永 二年 乙酉 秋九月 檀平

